

『精神現象学』 「B. 自己意識」における「労働」と「思考」の連続性

大西健太（大阪大学大学院博士後期課程）

本発表は G. W. F. ヘーゲルの『精神現象学』 「B. 自己意識」における「労働 (Arbeit)」と「思考(Denken)」の連続性とその構造を分析する。前後するかたちで論じられているそれらの直接的なつながりは、一見すると非連続的であるように映るからこそ、ヘーゲルの洞察の独自性をよりはっきりと示すものとして、丁寧に分析されなければならない。先に言ってしまうならば、同じく「自己意識」章において予め提示されている「欲望(Begierde)」の作用に、それらは根拠づけられている。すなわち、主体である「意識 (Bewußtsein)」にとって異質な存在を否定する働きとして、「労働」と「思考」とは連続的なのである。まさにこのことこそが「自己意識」章全体を貫く原理に即して内容を把握するために本質的であるにもかかわらず、L. Siep (*G.W.F. Hegel, Phänomenologie des Geistes*, D. Köhler und O. Pöggeler (Hrsg.), Akademie-Verlag, 2006)をはじめとする多くの先行研究はこの点を踏まえることなく議論を展開している。本発表では、「欲望」の概念が両者の根底にあること(全体の軸としてそれらを結び付けていること)を明確に念頭に置くことで、一見すると対照的な二つの概念がどのようにして連続的であるのかを分析し、ヘーゲルの洞察の独自性の一端を明らかにすることを目指す。